

**京都大学言語学懇話会
2014 年度 発表要旨**

例会報告

第 94 回例会

日時・場所 2014 年 4 月 12 日 (土) 13:30-16:45 於文学部新館第一講義室
発表題目 「能登島諸方言のアクセントについて—「語頭の隆起」とその後—」
平子 達也 (日本学術振興会／九州大学)
「ルーン文字の起源について」
河崎 靖 (京都大学)

第 95 回例会

日時・場所 2014 年 7 月 12 日 (土) 13:30-16:45 於文学部新館第一講義室
発表題目 「動詞項構造とクレオール化—ジュバ・アラビア語を例に—」
仲尾 周一郎 (日本学術振興会／京都大学)
「入声は如何に山西回廊で消えつつあるのか」
沈 力 (同志社大学)

第 96 回例会

日時・場所 2014 年 12 月 20 日 (土) 13:30-16:45 於文学部新館第一講義室
発表題目 「ジンポー祖語半母音の再構」
倉部 慶太 (日本学術振興会／東京外国語大学)
「アンシャン (イラン) 出土のシュメール語資料—楔形文字断片資料の読解
粘土板への 3D モデリング・写真データの利用—」
森 若葉 (国土館大学)

能登島諸方言のアクセント — 「語頭の隆起」とその後 —

平子 達也

金田一春彦 (1954) 「東西両アクセントのちがいが出来るまで」『文学』(22 (8) : 63-84.) は、金田一自身が最も情熱を傾けて執筆した論文だという。この論文において、金田一は石川県の能登地域諸方言のアクセントが、現在の京都方言に代表される京阪式アクセントから東京方言に代表される東京式アクセントへと変化する中間段階を反映している、と述べている。特に金田一が注目したのは、所謂「語頭の隆起」と呼ばれる $\bigcirc\bigcirc\dots$ (LL...) > $\bigcirc!\bigcirc$ (ML...) > $[\bigcirc]\bigcirc\dots$ (HL...) という変化が起こっているという現七尾市の能登島諸方言のアクセントであった。

「語頭の隆起」については、それが起こったとする証拠となる現象があまりないことが問題であったが、能登島別所方言における句レベルでの音調の表れや、以下の表に示す動詞活用形におけるアクセント交替現象からすると、この方言の先史において「語頭の隆起」という変化が起こったことは間違いないと考えられる。

表1 別所方言の動詞活用形におけるアクセント交替 (一部)

語幹	意味	非過去	過去・完了	非過去否定	過去・完了否定
kak-	「書く」	ka!k-u	ka!i-ta	ka[k-a]n	ka!k-a[na]nda
oki-	「起きる」	o[ki]-ru	o!ki-ta	o[ki]-n	o!ki-[na]nda

また、別所方言と周辺方言との比較によって、能登島においては「語頭の隆起」の後、音調の「一山化 (一峰化)」が起こり、そこには (a) 隆起した語頭拍がアクセント核を担うようになる変化 ($\bigcirc!\bigcirc\dots[\bigcirc]\bigcirc\dots > [\bigcirc]\bigcirc\dots\bigcirc\bigcirc\dots$) と、(b) もとあったアクセント核の有無および位置を保持する $\bigcirc!\bigcirc\dots[\bigcirc]\bigcirc\dots > [\bigcirc\bigcirc\dots\bigcirc]\bigcirc$ という変化があると考えられる。特に後者 (b) の変化については、現代東京方言と京都方言における複合語アクセントの類似性とも符合するものであり、「語頭の隆起」の後の変化についても、能登島諸方言のアクセントが東京式と京阪式とを結ぶ変化モデルとなりうる可能性がある。

(ひらこ たつや)

ルーン文字の起源について

河崎 靖

ルーン文字による言語資料が断片的であれ残っているおかげで、ゲルマン語の古い姿から中世の北欧語までを、データの裏付けに基づいた実在性のあるものとして捉えることができる。古フサルクの銘文はスカンディナヴィアとりわけデンマーク周辺に集まっている。それにしても、この北ヨーロッパ圏で他の地域と比べかなり早い時期にアルファベットによる文字表記が独自の文字体系の発展形として定着していることになる。

ルーン文字が直接どの文字体系をモデルにしたのかを問う問題提起を行っている先行研究を類別化してまとめると、① ラテン文字説、② ギリシア文字説、③ 北イタリア文字説 となる。従来、常にこれら3つの学説が取り沙汰されてきたが、いずれにしても、長い先行研究史の中でこれまで統一的で決定的な見解が打ち出されることがなかった。本発表では、かつて部分的には提出されることのあった④ フェニキア文字説 を再度とりあげ、合計4つの学説の強み・弱みを総合的に検討することを目指した。

(かわさき やすし)

動詞項構造とクレオール化 —ジュバ・アラビア語を例に—

仲尾 周一郎

南スーダン共和国の共通語、ジュバ・アラビア語 (Juba Arabic; JA) はアラビア語「クレオール」として知られる。

JA の上層言語・アラビア語スーダン方言 (Sudanese Colloquial Arabic; SCA) では形態論的に自他対応が標示される。JA でも統語論的振る舞いにより自動詞と他動詞は峻別でき、他動詞が有標な形式をもつ自他対応が少数見られる。しかし、むしろ JA では自他両用動詞が多数を占める (gfulu 閉まる・閉める)。SCA では自他対応は自動詞有標型 (itgafal 閉まる、gafal 閉める)、基層諸言語では他動詞有標型の形態論的標示をもち、いずれも JA における自他両用の広がりをも説明できない。

さて、クレオール言語学では、かつてはピッカートンによるクレオールの言語構造と第一言語習得の関わりを示唆した言語バイオプログラム仮説が注目を集めたが、近年では第二言語習得との関わりや基層・上層言語の影響が重視されつつある。この潮流は、クレオールは言語構造的にも言語系統的にも例外的な言語ではないとするパラダイム、「反『クレオール例外論』」により推進されている。

ところで、1) 自他対応の標示 (自動詞有標・他動詞有標型など) は通時的に安定した言語特徴とされ、2) 第二言語習得においても、自他両用は自他対応より習得が困難とされるにも関わらず、期待に反して自他両用は JA の基層・上層言語いずれにも多くは見られない。JA はこの点で「例外的」な言語変化を受けたといえ、「反『クレオール例外論』」と相容れない。対して言語バイオプログラム仮説では、クレオールと第一言語習得では自他両用が一般化されることを述べている。この観察は JA の自他両用を説明できる点で重要である。

以上より、JA には「反『クレオール例外論』」の反証となる言語現象が存在すること、また、そのままでは受け入れられないにしても、言語バイオプログラム仮説には今も再考の余地があることを示した。

(なかお しゅういちろう)

入声は如何に山西回廊で消えつつあるのか

沈 力

漢語の声調には、大きな変化が二度起こった。中古漢語を代表する『切韻』（6世紀頃の音韻体系を反映）の時代には、四つの調類—平上去入—があったが、それに加えて声母の清濁対立による声調の陰陽分化が始まった。中世漢語を代表する『中原音韻』（13～14世紀頃の音韻体系を反映）の時代になると、調類の陰陽分化のみならず、調類の合流も観察されるようになる。その過程の中で、入声も未分化から陰入と陽入へ分化し、さらに陰入と陽入が別の声調へ合流するというプロセスを経て消失してきた。

山西回廊の諸方言について、沈・馮・中野(2011)は入声が上記のようなプロセスで消失しつつあり、地理的には南から北へと波及する様相を呈するという説を打ち出した。本研究では、山西回廊諸方言における入声消失の要因を明らかにするため、入声消失の最前線にあたる靈石高地で606の村を調査し、以下の二つの要因を得た。

言語学的要因：当該方言における各入声音節中の母音の長さ

社会的要因：当該方言と入声を持たない中心方言との言語接触の度合

入声音節の母音の長さは、平坦声調を持つか曲折声調を持つかで異なる。平坦声調の母音は短い、曲折声調の母音は長い。母音の短い平坦声調の場合、入声は消失しにくい、母音の長い曲折声調の場合、入声が消しやすいたことが観察されている。

入声をとどめる形態素の数を調べ、地理的分布に当てはめたところ、南部南東<南部北東<南部南西<南部北西<北部全体という順に多くなった。この分布は、言語接触の度合で説明できる。言語接触の度合を計る方法として、「当該方言の人口密度」と「中心方言区からの平均徒歩コスト」を掛けた数値を用いた。この数値は方言中心地の人が24時間以内にほかの方言区へ歩いて行き、そこで接触可能な平均人数を示す。その結果、言語接触の度合が強いほど入声が消しやすいたことが観察された。

(しん りき)

ジンポー祖語半母音の再構

倉部 慶太

ジンポー語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属し、北部ビルマを中心に分布する。この言語の 7 つの方言間における半母音の対応として以下の対応が認められる。本発表の目的は、この音対応に基づき、ジンポー祖語の半母音を再構することにある。

	SJ	NK	GR	DL	DG	NP	TR	Conditions
(a)	w-	w-	w-	w-	w-	w-	w-	before *-a, *-o, *-u
(b)	y-	y-	y-	y-	y-	y-	y-	before *-a, *-o, *-u
(c)	?w-	?w-	?w-	w-	w-	w-	w-	before *-a, *-o, *-u
(d)	?y-	?y-	?y-	y-	y-	y-	y-	before *-a, *-o, *-u
(e)	y-	y-	w-	w-	w-	w-	w-	before *-i, *-e
(f)	?y-	?y-	?y-	∅	∅	∅	∅	before *-i, *-e

まず、(a) および (b) の対応に対して、祖形 *w-、*y- をそれぞれ再構する。その根拠は、これらは全ての言語間で一貫して w- または y- で現れるためである。次に、(c) および (d) の対応に対して、祖形 *?w-、*?y- をそれぞれ再構する。前声門化半母音の分布は予測不可能であり、したがって祖語に仮定しなければ説明がつかないためである。

主要な問題となるのは、(e) および (f) の対応である。上述の対応に比して、これらの対応はより複雑である。本発表では、(e) の対応に対して祖形 *w- を再構する。その根拠は、音変化の自然性および多数決の原理に基づく。すなわち、前舌母音の直前という環境において *w- > y- と変化する方がその逆よりも自然である。この変化は逆行同化により説明できる。また、ジンポー語群の系統分類は、SJ、NK、GR が単一グループをなすことを示しているのであるが、これは w- の分布がより広いことを意味し、祖形が *w- であることを示唆する。逆に、(e) に対して *y- を再構するならば、前舌母音の直前という環境で *y- > w- という音声的に不自然な変化が独立して 2 回起きたことになり、蓋然性は低い。一方、(f) の対応には、祖語の体系性に基づき、祖形 *?w- を再構する。まず、前舌母音の直前で ∅ に遡る対応が他にある事実がある。また、上述の (e) に対する *w- の再構は祖語の段階で *y- が前舌母音の直前に立たなかったことを意味するが、これと並行的に *?y- も同環境に現れなかったと考えられる。(e) との並行性から (f) に *?w- を再構する。

(くらべ けいた)

アンシャン（イラン）出土のシュメール語資料 —楔形文字断片資料の読解 粘土板への 3D モデリング・写真データの利用—

森 若葉

イラン国立博物館には 1971 年から 1978 年にイラン・ファールス州のマルヤン遺跡（古代名アンシャン）で発掘された文字資料が数百点収蔵されている。アンシャンは、インダス文明地域とメソポタミア文明地域の上に位置する主要都市の 1 つである。アンシャンの名は、前 3 千年紀後半のシュメールやアッカドのテキストにすでにあらわれ、前 2 千年紀や前 1 千年紀のエラムの支配者たちは「アンシャンとスサの王」を称した。

マルヤンからは、原エラム文字資料、楔形文字資料（エラム語、シュメール語、アッカド語）が出土している。

本発表では、未発表のシュメール語楔形文字断片資料 2 点（石製容器、粘土板）について、その調査・研究過程を紹介し、そのシュメール語で書かれた資料の内容を紹介した。石の容器の一部である資料は、8 文字しか残存していないが、他の碑文との比較から、ウル第 3 王朝初代の王であるウルナンムの王碑文断片であることが示された。

粘土板の断片資料は、表面の摩耗が激しく判読できない部分が多かった。そのため、文化財科学の研究者との共同研究で、3D モデルや反転写真を文字がもっとも見えやすい状態に調整してもらい、文字の復元をすすめた。3D モデルは、回転可能であることから、粘土板のような資料の記録としては非常に優れている。しかしながら、単にそれだけでなく、表面が摩耗している粘土板においては、その読解の助けとなることがわかる。この断片資料の文字体はウル第 3 王朝期のシュメール語ときわめて近い。内容は日々の支出記録の集成文書であるが、用語や様式は、シュメール中心部である南部メソポタミアのものとやや異なっており、現地の書記が書き記したものであると推測される。

これらの 2 点の資料は、前 3 千年紀にエラム語圏であるアンシャンでシュメール語の文書が作成されたことをしめす重要な資料であると考えられる。

（もり わかは）